

平成29年度普及指導活動外部評価委員会（開催日：平成30年1月29日）

「評価委員からの意見」及び「次年度の活動について」

島根県農林水産部農業経営課

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
<p>JA 水稲育苗ハウス等を活用した新規就農の仕組みづくり (松江農業普及部)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆だんだん営農塾という就農前の基礎研修を運営しながら、意欲のある新規就農者を輩出してサポートしていく様子が、Iさんという個人を例に挙げて報告され、具体的でよくわかった。 ◆新規就農者に対する「地域への円滑な定着と就農」と「初期投資の軽減」といった支援は、初心者が地域に根づき、農業を継続していくためには不可欠。 ◆関係機関でつくる営農塾の出身者を育成する初のケースで注目度は高い。 ◆初期投資の軽減、収量確保など目標は具体的で適切。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆就農前の臨時雇用を兼ねた実践研修先を紹介する際に、就農後も師弟関係が持続するような研修先を選定することは、「地域への円滑な定着」に大切な人間関係を構築する大きな助けになる。 ◆またJAに提案した水稲育苗ハウスの貸し出しや、JAや市と連携しての遊休ハウス賃貸物件の仲介は、「初期投資の軽減」に効果的。 ◆関係機関一丸になった支援で実現したことがうかがえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆新規就農者が、取り巻く関係者と信頼関係の構築や初期投資の自己負担額を約60%軽減できており、普及活動の効果が出ている。 ◆Iさんをモデルケースにすると、就農までの流れがイメージしやすく、やってみたい人が続くのではないかと。 ◆構築した仕組みを活かして後に続く人材を掘り起こすことが重要。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆技術面の指導のみならず、新規就農者が地域に根づくための環境を整える支援も丁寧であると思う。 ◆新規就農者のフォローアップを継続してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実践農場として、JAの水稲育苗ハウスを有効活用することについて関係機関の理解は得られた。平成31年度にはIさんに体験希望者の受入農家になっていただく予定である。 ○周年活用できる、廉価なリースハウスの整備をJA及び松江市に働きかけていく。 ○新規就農者のフォローアップは継続中。栽培状況や、面談では(複数年の)財務諸表を確認しながら各種相談に対応していく。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
<p>稲WCS・SGSの推進と 耕畜連携のしくみづくり (松江農業普及部安来支所)</p>	<p>◆耕畜連携の仕組みは重要であり今後推進していくべき。</p> <p>◆WCS、SGSの生産、利用技術に対して適切な対象、関係機関との調整、成果目標が設定。</p> <p>◆稲WCS・SGSは、米格が安くなったことで稲作農家から注目され、畜産側からも栄養価が高い作物として関心が高くなっているが、400kgパックは持ち運びが困難で多頭向けのイメージが強く、少頭数飼いにも目を向けていることは評価したい。</p> <p>◆畜産クラスターをふまえた上で技術の確立が展開されている。</p> <p>◆耕畜連携に効果が高い稲WCS・SGSが検討対象であり、耕種・畜産農家の経営発展のみならず、地域振興においても波及効果の高い対象が選定されている。</p> <p>◆普及現場の生産者、市、JA、NOSAIなどと緊密な連携がとれている。</p> <p>◆稲WCS・SGSの推進は、飼料自給率と土地利用向上に必須であり、喫緊かつ適切な成果目標が設定されている。</p>	<p>◆WCSについては、平野部及び中山間部の5箇所の実証を行うなど効果的に活動されている。</p> <p>◆SGSは保存試験、検討会開催等で組織的な活動体制となっている。</p> <p>◆関係機関との連携、役割分担ができています。</p> <p>◆WCSの品質状況や給与量の指針はあまり示されておらず、所によって栄養が良すぎて繁殖障害が起きているところもあり、その給与体制を明確に県全体で指導してもらえればより利用者が増え、畜産農家も耕種農家もお互いが助かり、400kgパックも20kgパックに詰め替えが可能なら少頭数飼いでも利用しやすくなる。</p> <p>◆稲WCS・SGS技術が未確立の中で展開している点で、適切な時期に活動を始めている。</p> <p>◆支援内容の重点は、耕種農家と畜産農家双方の経営改善であり、今後の高い効果が期待できる。</p> <p>◆農林振興協議会畜産部会のもとで、関係機関との間に組織的な連携がとられ、役割分担も明確になされている。</p>	<p>◆WCS、SGSの成果目標は達成され分析もされている。</p> <p>◆稲WCS需給調整については、耕畜連携により年間利用が可能となり今後他地域での波及効果が期待される。</p> <p>◆年々畜産農家が減り、高齢化が進んでいる現状の中で、耕畜連携の仕組みづくりは重要で、研修会などで新たな利用拡大が増えることは、これからますます期待できる。</p> <p>◆普及活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。</p> <p>◆実証圃の設置、保存試験の実施、需給調整の実施、リーフレットの配付などを通して意識の変化が大いに期待できる。</p> <p>◆稲WCS・SGS技術の確立のみならず、新たな耕畜連携の展開など、地域への高い波及効果が期待できる。</p>	<p>◆県内でも耕畜連携がとれている地域とできていない地域があり、また地域内でも需給バランスが違うので、将来的には、県全体での農業連携を望む。</p> <p>◆年間給与が可能なら、畜産農家も安心して飼料確保に期待が持てる。</p> <p>◆現場での緻密な試験や合意形成など、対象への積極的な関与により、普及員の資質向上が実現している。</p>	<p>○水田飼料等の広域的利用に関しては、県の第3期戦略プランにおける「水田フル活用に向けた耕畜連携推進プロジェクト」の中で体制構築を掲げている。</p> <p>○既に一部の地域では、市町村を超えた飼料等の広域流通の取り組みも行われており、他地域での状況等を参考とし、広域流通の仕組みを検討していく。</p> <p>○稲WCSの成分や給与量の目安はあるが、実際の給与には、製品の品質や牛の個体差、繁殖ステージ等により柔軟な管理が必要となる。品質が安定すれば、給与体系を具体化して指導に結び付けることができるため、今後も良質な稲WCSの生産指導に努めていきたい。</p>

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
やすぎ農業サポートセンターの取り組み (松江農業普及部安来支所)	<ul style="list-style-type: none"> ◆私が知る有償ボランティアシステムにも田畑の手入れの依頼が来るが、なかなか応援者が見つからない。経験者となると超高齢者ばかりで、依頼するのも気の毒になる。こうした実感がある中で、農作業技術を持った応援者と利用者をコーディネートする仕組みが農業サポーター制度といった形で構築されると、心強く思う人は多い。 ◆受け入れ側の農業者がサポーター制度へ寄せる関心の高さが良く分かる。 ◆支援協議会の設立など関係機関の連携は十分。 ◆現状分析、目標値の設定など数字の裏付けもあり、具体的でよくわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆農業に関心のある方々にとっては、サポーター養成研修の中で基礎や実践を学ぶ流れは、ある程度の技術獲得が期待できるので、農業に関わる第一歩として踏み出しやすいのではなか。 ◆何より大変なのはマッチング部署であり、人数を手厚くして、一人が抱え込み、疲弊しないような体制を強化してほしい。 ◆サポーター、受け入れ農家双方への働きかけやマッチングなどきめ細かい活動になっている。 ◆指導農業士を活用するなど一体感のある制度運用をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆サポーターの登録数、マッチング農家数、マッチングサポーター数とも順調に伸びており、効果的に普及は進んでいる。 ◆マッチングサポーター数は延べ数ということで、人気のあるサポーターは偏りがちになるので、登録したサポーターは誰でも活躍できる工夫を期待する。 ◆今後に向けた制度強化の方向性も明確で波及効果に期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆一時のサポートのおかげで、やりがいを持って取り組む農家が持続経営できるよう、きめ細かく配慮されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○サポーター養成研修については、引き続き基礎研修、実践研修を実施し、農家からの要望に応えられようサポーターのスキルアップを図る。 ○事務局体制の強化については、毎月、安来地域担い手育成総合支援協議会新規就農分科会を開催し、円滑に事務局活動が行えるよう支援しており、今後も継続実施していく。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
奥出雲町の集落営農法人化の推進 (雲南事務所農業普及部)	<p>◆過去数年、県としては集落営農の法人化を推進しているが、一部ではなぜ伸び悩んでいるか、を「見える化」すべき。</p> <p>◆今、どこの地域でも個々の稲作経営は限界にきており、集落営農が増え、次世代に繋げるためにと法人化が進んでおり、関係機関の連携の後押しなくしては前に進めない。</p> <p>◆地域のおかれた状況と個別農家の規模拡大の限界をふまえた上で普及活動が展開されている。</p> <p>◆集落営農法人化が検討対象となっており、法人の経営発展のみならず、地域振興においても波及効果の高い対象が選定されている。</p> <p>◆現場の生産者、町、JAなどとの緊密な連携がとれている。</p> <p>◆集落営農法人化は、中山間地域の農業・コミュニティ維持において必須の取り組みであり、喫緊かつ適切な成果目標が設定されている。</p>	<p>◆もう一步、踏み込んだ活動内容、取組が必要。</p> <p>◆稲作農業で一番の問題である「コスト対策」に対する活動+法人化の推進を望む。</p> <p>◆関係機関が積極的に集落営農の組織化や法人化の支援に取り組んでいるのは、これからの地域を維持していくために一番大切。</p> <p>◆法人化しても、なかなか黒字経営に持っていくのは大変という声を聞くことがあるので、法人経営管理の支援は特に必要で、経営状態を把握し、経営改善の支援に力を入れてもらいたい。</p> <p>◆高齢化・後継者不足が深刻化する中で展開している点で、適切な時期に活動を始めている。支援内容の重点は、組織化・法人化の相談、経営管理支援であり、今後の高い効果が期待できる。</p> <p>◆関係機関との間に組織的な連携がとられており、役割分担も明確になされている。</p>	<p>◆県として、良質米産地で米依存が高い地域を施設園芸等経営多角化へ推進するのは時代の流れかも知れないが、仁多米ブランドと言っても全国的にはまだまだ知名度は低いのが現状。「東の新潟魚沼」のように「西の島根仁多」を確立できれば、島根県全体の米のイメージアップにもなり、さらに良質米産地である事を利用した取組、推進が必要。</p> <p>◆法人化と一言で言っても、その経営内容は様々で、その中で発生する問題点を把握し、その解決に向けて動けるのは、関係機関ならではと思う。</p> <p>◆普及活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。</p> <p>◆外部専門家等の指導、手引き、労務費集計表の提供などを通して意識の変化が大いに期待できる。</p> <p>◆集落営農法人化のみならず、よりふみこんだ経営分析など、地域への高い波及効果が期待できる。</p>	<p>◆集落営農→農事組合法人化はあくまでも組織形態を変更する手段でしかなく、地域を守るための継続的な運営には、組合員の労働時間、福利厚生、収益性の確保が必要。</p> <p>◆現場での緻密な合意形成や簿記会計支援など、対象への積極的な関与により、農業普及員の資質向上が実現している。</p>	<p>○未組織集落では、中山間直協定を手がかりに組織化を進めるとともに、既存集落営農組織の協業化及び法人化の支援を行う。</p> <p>○集落営農の推進により水稲栽培技術の高位平準化が期待されることから、引き続き仁多米ブランドの確立に向け、生産・販売面での支援を行う。</p> <p>○水稲の省力化により生じた労働力を園芸作物等へ向けるなど、法人経営の安定と継続性を確保するとともに、記帳指導を通して経営状況の把握と経営改善の支援を行う。</p> <p>○集落営農組織の作業効率の向上と生産コストの更なる節減に向け、広域連携組織の育成に向け支援する。</p>

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
平田の柿産地活性化を目指したリース団地等の取り組み (出雲事務所農業普及部)	<ul style="list-style-type: none"> ◆生産者調査を踏まえた再生プロジェクトを実施し、生産部会が核となり協議を進めている点が参考となった。 ◆産地化がなされている地域で新たな課題を把握し、その解決に向けた取り組みが組織的になされているのが素晴らしいと思う。 ◆スローガン設定により、目標の共有を図る手法はどの地域、どの課題でも取り入れやすい効果的な手法であると感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆部会の生産対策部会が全面的にバックアップする産地を上げた取り組みがなされ、関係機関が役割を明確化し進めている点も一体感が感じられた。 ◆60年の歴史に基づく産地をいかに次世代につなげていくか。 ◆行政とJAの連携であんぼ柿の増産にむけた設備投資もできたので、次はいかに稼働率を上げ、より品質の良いものを作っていくか、専門家も交えた支援体制が必要だと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆新たな担い手の確保策、従来なかった露地園地のリース化については、成果目標の達成に向けた多方面の視点から検討された結果であり、普及部を中心とした県域での波及を期待する。 ◆栽培面積全体の5分の1を次世代が担っていることにびっくりした。 ◆まず実践して成功例を作っていることが活発な動きとして表れていると感心した。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆第1段で終わるのではなく、次の対策まで計画しつつ進めており、経験と個人の信頼感のつながりを感じた。 ◆関係機関の次世代への伝承も、ある意味、組織内での後継者問題として取り組みをお願いする。 ◆支援側もこれまでに積み上げられたノウハウをいかに若手につなげていくかが重要 	<ul style="list-style-type: none"> ○平成28年度より、西条柿コンソーシアム事業によるSCS冷蔵庫の貯蔵試験を実施(島根大学、(株)スーパークーリングラボ、農業技術センター等)。製品化率向上は、技術普及部と連携し支援している。 ○活動の成果については、県担当者会、普及員研修、技術普及部実証検討会での情報共有を図ることで波及につなげたい。 ○普及員の平均年齢が若返る中、指導技術の底上げは普及組織としての大きな課題と認識している。出雲管内では、普及員を対象とした研修の実施や講習会等への積極的な参加を促し、指導レベルの底上げを図っている。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
集落営農の経営多角化支援 (浜田農業普及部)	<ul style="list-style-type: none"> ◆地域の状況、環境の変化に対応した課題設定であり波及効果の高い普及対象だと思う。 ◆大麦若葉の取組面積、水稻との比較、需要量等もう少し詳細なデータがあると分かりやすい。 ◆水稻生産で米価の下落は致命的で、それに見合う新しい作物が生まれていることは心強い。 ◆当該3法人のおかれた状況をふまえた活動が展開されている。 ◆集落営農の経営多角化が検討対象となっており、当該法人の農業経営発展のみならず、他の法人の農業経営発展や地域振興においても波及効果が高い。 ◆当該3法人との緊密な連携がとれている。 ◆集落営農の経営多角化は、収益性向上や高付加価値化のみならず、地域振興において重要な取り組みであり、喫緊かつ適切な成果目標が設定されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆大麦若葉の安定生産に向けた技術的な支援、組織体制の連携支援など効果的。 ◆米づくりとは違い麦づくりは排水対策が重要で、実際に長年麦を栽培している地域への視察は大いに参考になり、一番の課題の機械導入も、法人間での共同利用ができれば大きな出費も抑えることができ、組織間のメリットが大きい。 ◆有機栽培大麦若葉の需要が増加する中で展開している点で、適切な時期に活動を始めていると考える。支援内容の重点は、安定生産技術、法人間連携であり、今後の高い効果が期待できる。 ◆関係機関との組織的な連携と役割分担が明確。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆全国的に大麦若葉の需要度がどのくらいあるのか？水稻との比較(売上、コスト等)のデータがあれば、さらに波及効果がある。 ◆安定した栽培と安定した販売先の確保が必要。 ◆以前から大麦若葉が栽培されていたことは問題点も明確で普及上も取り組みやすく、健康志向が強まっている今は特に需要が増え、これからも期待が持てそう。 ◆集落営農法人と有限会社の連携は、それぞれの分野で補えることができ、大いに成果が出ている。 ◆稲作より労働時間が減り収入が上がるとなると、さらに意欲も増してくる。 ◆普及活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。 ◆排水性の向上などによる高収量の実現や栽培暦の作成により、意識の変化が大いに期待できる。 ◆法人間連携の今後さらなる足がかりとなるなど、地域への高い波及効果が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆稲作に依存しない地域の取組としては、このような事例、取組は非常に有効だと感じた。 ◆他にあまり例のない作目でも天候には大いに左右され、それに向けた対策や有機JASを取得しキロ単価をアップ、オペレーターの確保など課題が明確で、問題解決し、さらに地域を引っ張ってほしい。 ◆現場での技術支援、緻密な合意形成、法人間連携支援など、対象への積極的な関与により、普及員の資質向上が実現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ○気候によって収量は影響を受けるため、今後も栽培技術の確立と安定生産に向けた支援を行っていく。 ○全国的な需要は横ばいになりつつあり、加工を行う有限会社も海外展開を視野に入れていることから、今後も必要な支援や情報提供を行っていく。 ○水稻との経済性の比較は、今後収益分析を十分に行い、地域における生産拡大につなげていきたい。 ○今後も関係機関と協力し、集落営農法人のオペレーターや人材確保の支援を行っていく。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
地域の総合力発揮に向けた「見える化」の取り組み (県央事務所農業普及部)	<ul style="list-style-type: none"> ◆徹底した「見える化」により地域一体となった情報共有、高収益型の体制環境変化等に対応。 ◆JA、町、普及で班編成され徹底したデータ収集、整理されている。 ◆増頭対策、飼料堆肥の流通対策により、売上前年比等に対して「見える数字」の目標も必要。 ◆農業は高齢化が進み、個々では日々の生産活動に対応できなくなりつつあり、こうした関係者の連携は必要不可欠。 ◆畜産クラスター計画策定に向けた「見える化」だが、関係者（普及する側、される側）が現状や目標共有のために「見える化」を図るプロセスを具体的に知りたい。 ◆農家全戸調査で整理したものは、関係機関だけで作成したのか、その後の課題化は、農家も一緒に検討したのかを知って「見える化」が相互目線のものかどうかを聞きたかった。 ◆当該地域のおかれた状況と畜産農家の意向をふまえた活動展開。 ◆幅広い層の畜産農家が対象で、畜産経営のみならず、耕畜連携をはじめとする地域振興でも波及効果の高い対象が選定。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆増頭対策については繁殖管理システム、繁殖巡回によって進められるのは効果的。 ◆組織体制はJA、市町、普及部と組織的になっている。 ◆関係機関との連携、役割分担はできているが具体的な役割分担、体制の内容が分らない。 ◆大田市に県央地区畜産総合センターが出来たことにより、多くの畜産農家は、家族の病気や止むを得ない様々な理由でも牛を手放さずに継続して飼える仕組みができたことは心強い。 ◆「見える化」してワンペーパーにまとめることは、担当者が替わっても、数字で残っているので客観的に判断しやすく、困った時に立ち返る拠り所にするのに効果的。 ◆様々な立場の関係者が、同じものを見て多様な意見を吸収しながら協議することは欠かせないことであり、良い手法。 ◆中長期の先を見越した活動を展開している点で、適切な時期に活動を始めている。支援内容の重点は、幅広い領域にまたがる「見える化」であり、今後の高い効果が 	<ul style="list-style-type: none"> ◆「見える化」によって細かくデータ収集、わかりやすくペーパーへ整理されており成果目標の達成の要因が分析されていた。 ◆うまくいかなかった失敗例など問題点等もあると良い。 ◆今後地域への波及効果は期待される。 ◆関係機関が一つになって、畜産農家全体の抱える問題点を共有し、その問題解決に向けた取り組みは大いに評価したい。 ◆畜産農家だけでなく、集落営農組織と一緒にになった粗飼料、堆肥の流通対策は、双方にメリットが生まれる。 ◆「見える化」の取り組みは、まだ緒に就いた段階、ということなので、今後普及ワークシートを作成し、その蓄積が進むとより円滑な普及活動が進む。 ◆活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。 ◆管内の全畜産農家を対象に現状と課題を詳細に分析しており、繁殖巡回とあわせ「見える化」による意識変化が大いに期待できる。 ◆耕畜連携を始めとする新たな地 	<ul style="list-style-type: none"> ◆島根の畜産業の為に、今回の内容を県全体に推進することを願う。 ◆今後、県全体で畜産、養鶏、水稻との連携システムができれば、飼料、堆肥の需給のミスマッチが減ると思う。固定地域内に限らない流通対策も必要。 ◆農業は天候に左右され、稲わら収集でも、昨年の秋以降は雨の影響でゼロに近く、そうした基盤強化を今後とも後押ししてほしい。 ◆今後につながる基礎づくりをしっかりされている印象を持った。 ◆聞き取り調査や繁殖巡回など、対象への積極的な関与 	<ul style="list-style-type: none"> ○全農家に対するアンケート調査結果は、集計結果に基づき関係機関で協議し、課題及び対応策を選定の上、クラスター計画の策定に活用したところ。 ○クラスター協議会には、生産者団体が構成員として参画し、クラスター計画への意見等を反映する体制となっている。 ○今後は、個別の生産者に取り組みへの理解を深めてもらうため、各改良組合の総会等での情報提供を検討する。 ○クラスター協議会では毎年度、クラスター計画のKPI及び具体的行動計画の進捗状況を把握することで、計画の進行管理を実施している。これらの結果を協議会構成員で共有し、PDCAサイクルを回していくことで、目標達成

	<ul style="list-style-type: none"> ◆畜産農家のみならず、JA、市町などとの緊密な連携がとれている。 ◆「見える化」は必須であり、喫緊かつ適切な成果目標。 ◆県央地区畜産総合センター設置協議と並行し、地域の要望を聞き取りという確実な手法で積み上げ、施設設置の協議に反映できている、生産者・行政・JAの果たすべき役割と課題を「見える化」して評価できる。 ◆大田地区と邑智地区の利用計画も明確に示され、生産者も情報共有できている。 ◆全農家のデータを取るなど地域全体の底上げを狙った課題。 ◆普及部が調整役になって他機関にそれぞれの役割を發揮させる手法は継続した活動になり、成果も出やすい。 ◆関係機関の支援側の連携体制が整ったので、いよいよ産業クラスターとしての畜産クラスターが形成され進むことを期待。 	<p>期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆組織的な活動体制になっており、関係機関との連携、役割分担も明確になされている。 ◆地域の課題を明確化し、産地の意欲がある時期に従来から連携している関係機関が生産者と一体となって、課題解決に向けて取り組みを普及部が中心となっている。 ◆クラスター計画と連動しており、活動体制も組織的。 ◆全畜産農家へのヒアリングによりこれまで見えなかった課題が顕在化したことは評価できるが、その内容は対象者にどのようにフィードバックされたのか知らなかった。 	<p>域農業モデルにより、地域への高い波及効果が期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆目標達成に向けた取り組み計画、実証による課題・対策、情報をワークシートにまとめ将来に向けて情報共有できる仕組みづくりを行い、限られた人材で大きな効果発揮できる「連携」が、生産者を中心に波及効果が着実に見えると感じた。 ◆繁殖巡回指導の重点対象農家が増えれば成果は目に見えてくる。 ◆活動記録のワークシート化は重要で評価できる。 ◆調査や試行だけで終わらせないことが大事。 ◆「見える化」することが目標？それにより解決できる課題と、現状と目標の数値化があると事業の振り返りがしやすく、実際に進めるときのコンセンサスを得やすい。 	<p>により、農業普及員の資質が向上している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆生産者の立場に立った取り組みであり、県内での農業振興に参考になると感じた。 ◆普及が中心的役割を担っており、関係機関からの信頼につながっている。 ◆民間企業では当たり前になっている情報・進捗状況の共有システムが行政にも取り入れられることで、これまで課題だった事業の引き継ぎが円滑にいくと考えられる。 	<p>に向けた取り組みを推進していく。</p>
--	--	---	--	--	-------------------------

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
<p>“目指せ！1億円”若手生産者によるぶどう産地活性化に向けた取り組み (県央事務所農業普及部大田支所)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆若手生産者を誘導して地域の課題解決に向けた協議を行っていることは大変重要なこと。 ◆同年代の関係機関職員が集まることで、ベテランでは気が付かない点も浮かび上がると思われ、リーダーとなる普及員の調整能力を感じた。 ◆産地の世代交代のタイミングでビジョンづくりがスタートし、良い渦ができています。 ◆今後、ビジョンに基づき具体的な成果を数値目標化されることと達成進捗の共有方法の精査、見える化を図ることで、より多くの応援団ができる可能性があると感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆是非とも、大田管内での各生産部会等で取組みを行ない、発表する場があると地域農業も活性化すると思った。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆リースハウスの設置、美味しまね認証取得等、具体的な方法論も見えており、新規就農者をどう確保するかが、農大等と連携した場合には解決できる地域と思うので、引き続きの取り組みをお願いします。 ◆普及対象のモチベーションも高いと推察される。 ◆具体的な事業計画のこれからの進捗を注視したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆小さい産地が動きやすいことがあるので、その点に着目した取り組みと感じた。 ◆これからの島根の農業の活性化にロジカルな現場主義が必須。 ◆現場主義、コミュニケーション主義の若手普及員の存在はとても頼もしく思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○現在産地ビジョンの改訂を進めており、年次別目標の数値化やリースハウス事業導入年度の明記など、具体的な目標値を掲げ、進捗状況が見える化できるよう支援を行う。 ○大田市農林業振興協議会において、他品目についてもビジョン作成の取組が進んでいる。 ○産地ビジョンに基づく新規就農者の受け入れについて、農大とも十分に連携し活動を行う。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
<p>若手の法人参加とGAPの導入 (益田事務所 農業普及部)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆中山間地域の問題である人口減少、農業従事者の減少、高齢化に適した課題設定。 ◆法人化、後継者育成、GAP 導入、美味しまね認証に向けた効果の高い対象が選定されている。 ◆法人化後の具体的な経営面での目標も少しは必要。 ◆集落営農組織の後継者育成は、どの組織でも一番の課題で、その取り組みに注目したい。 ◆少人数で立ち上げた任意組合に対し、将来を見据えて地域の農業・農地を持続的に守るため、後継者育成とGAP手法導入による組織運営体制の強化という活動目的の二本柱を立てたことは分かりやすく、納得できた。 ◆当該地域のおかれた状況と若手農家の意向をふまえた活動が展開されている。 ◆30～40 歳代の若手生産者が対象となっており、経営発展のみならず地域振興でも波及効果は高い。 ◆法人の構成員のみならず、関係機関との緊密な連携がとれている。 ◆若手の法人参加やGAPの導入はいずれも必須の取り組みであり、喫 	<ul style="list-style-type: none"> ◆地元の若手世代と集落ビジョンづくりの意見交換会を重ねた点が一番重要であり効果的。組織理念の統一、集落ビジョンの作成、GAP の導入、美味しまね認証取得などは非常に効果的。 ◆組織体制、関係機関とも連携ができています。 ◆連携、役割分担はよくできているが、細かい役割分担等の内容が分からなかった。 ◆若い世代を巻き込んだ意見交換は有意義。 ◆「GAP」手法導入、美味しまね認証など、同じ米づくりでも特別の付加価値が付けば、次世代を担う人もやりがいが見出せる。 ◆地域に暮らす若手世代と「城九郎の農地・農業をどのようにしていきたいか」の意見交換を重ね、普及部が課題の洗い出しや集落ビジョンを描く支援を行ったことはとても意味あること。 ◆経験や技術の取得以前に、個々の想いを擦り合わせ、形にすることは組織が盤石になる基本。 ◆中長期の先を見越した活動を展開している点で、適切な時期に活 	<ul style="list-style-type: none"> ◆GAP の導入、美味しまね認証取得など明確な目標と分析もされており、今後に期待。 ◆農事組合法人の今後の課題として、特に若手世代が、【本業の仕事】+【農事組合】+【地域の仕事、役割】+【自分の時間】をバランス良く整理して理解する事が重要。理解してくれる若手の地域には波及効果が期待される。 ◆組合員の中に若い世代が大半で、作業自体もサラリーマンをしながらでも一緒にできるというところは、大切なところ。 ◆専業になると、農業だけでは生活できない部分もあり、勤めをしながら休日などを利用した仲間入りは経済的負担も少なく、他の組合員も心強い気がする。 ◆若手5名を加えた11名で「(農)城九郎」を設立し、若手の中からも役員を登用した、というのは後継者育成の目的達成につながったと思う。 ◆「米」で「美味しまね認証」を取得したことで自信を持って皆さんに勧められる、というのは到達点が目に見えて良い。 ◆活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。 ◆法人設立、早期の認証取得から、 	<ul style="list-style-type: none"> ◆農事組合法人化はあくまでも組織形態を変更する手段でしかない。地域を守るためにも、継続的な運営には、収益性の確保が必要。 ◆高収益作物が導入されることで次の後継者も生まれやすく、周辺地域との連携も重視されている取り組みは、若い人たちがいない他地域からもモデルとして注目され、これからの飛躍を期待したい。 ◆活動のねらいが明確で、成果につながるまでがわかりやすくまとめられていた。 ◆丹念にコミュニケーションを取りながら活動を進めて 	<p>1 集落ビジョンの実践</p> <ul style="list-style-type: none"> ○明確な目標設定及び関係機関との連携により、組織の経営体力向上のための支援を行っていく。 ○若手構成員への水稻栽培技術向上、水田放牧支援、農地整備事業導入支援を行う。 <p>2 農産物の収益力向上</p> <p>(1) つや姫品質高位安定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○実証ほを設置し生育診断等を通して温暖化に対応した水稻品質向上対策を図っていく。 <p>(2) きぬむすめの多収化</p> <ul style="list-style-type: none"> ○法人の収益向上のため多収化支援を図ると共に資材コスト等の低減を図っていく。 <p>(3) エコ推奨取得</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生産物の高付加価値化により経営体の収益向上につなげていく。 <p>3 経営管理の向上</p>

	<p>緊かつ適切な目標設定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆集落営農の次世代への引継ぎに対して、地域との課題の視点で関係機関が調整することで、新たな取り組みになった実例。 ◆世代交代を進めたい集落営農組織が増える中、一つの参考事例になる。 ◆地域のキーマンとしっかり信頼関係を築けている様子が伝わった。 ◆今後、販路やブランディングといった側面支援を多面的に行える関係機関と専門家の支援体制があるとより加速度を増して成果が上がる事例。 	<p>動を始めている。若手の法人参加とGAPの導入は、今後高い効果が期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆法人の組織体制は後継者育成を見据えており、高く評価できる。 ◆早期の「美味しまね認証」取得から、関係機関との連携、役割分担が明確。 ◆組織の課題を真摯に受け止め、若手世代を協議の主役とした点は、体制に恵まれていたこと以上に、熱意が感じられた。 ◆普及が前面に出ていることはわかるが、市やJAなどとのチーム活動は見えない。 ◆キーマンとの連携により地域の問題意識を高め、実際に動き始める支援がタイムリー。 	<p>意識の変化が大いに期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆若手生産者によるGAPの導入など、地域への高い波及効果が期待できる。 ◆法人化を機会にGAP取り組みを開始し、組織員の意識改革と新たな視点での取り組みが実行。 ◆兼業組織員も地域の後継者の位置づけを理解していることは、他の地域への波及効果が期待できる。 ◆ビジョンづくりや県版GAP導入にかかる支援内容は一般的で具体性に乏しい。今後に向けた普及活動も同様に感じる。 ◆今後、成果目標の数値化とゴール設定、進捗と達成状況とその要因の共有を期待したい。 	<p>いる様子に共感した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆集落ビジョンづくりやGAP導入に対する綿密な支援など、対象への積極的な関与により、普及員の資質向上が実現している。 ◆課題である担い手確保、地域の維持について、行政のと普及の立場から提案し実行していることは、普及部全体の意識の高さを感じた。 	<p>(1)GAP 導入継続支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ○農業経営の「見える化」及び後継者への経営継承の促進を図っていく。 ○関係機関との連携により認証取得後の生産工程管理状況を確認していく。 <p>(2)法人間連携の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ○近隣法人との連携による労働力の補完及び生産コストの低減を図り、持続的な組織運営体制の構築を図っていく。 ○組織経営状況を確認し、継続的な担い手確保や経営体制の強化を図っていく。
--	--	---	--	--	--

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
<p>“産地”の意識を変えたビジョンづくりの取り組み (益田事務所 農業普及部)</p>	<p>◆アンケートに基づいた課題解決の取り組みとなっているが、農地流動マップや農家巡回等については、JAや市との連携がやや希薄のように感じた。</p> <p>◆但し、普及事業の継続性の為に作業をしている努力は十分伝わったので、産地の課題と対策を、生産部会を中心に取り組んでほしい。</p> <p>◆全戸ヒアリングから見えてきた本音と実態がベースになって、今後の効果的な支援につながることを期待する。</p>	<p>◆地域の課題で出てきた自家就農の場合の施設老朽化の不安等については、県の政策にしっかりつなぐべきと感じた。</p> <p>◆この課題は以前から言われていることで、従来は生産者個人がすべきことで整理していたが、現状を踏まえた場合にそれで良いのかとの疑問を感じた。</p> <p>◆主要園芸産地の維持発展プロジェクトの支援状況がわからなかった。</p> <p>◆現状、普及員の頑張りで見えてきた。ここから、どのような体制で支援していくのか、プロジェクトチームが有機的に機能することを願う。</p>	<p>◆10年後に向けて生産者の後継者対策が課題となっているのであれば、3億円の産地をどう次世代につなげるかになるので、面的な対策協議が必要と感じた。</p> <p>◆現状把握とマップ作成で、支援のための礎が出来上がる。</p> <p>◆普及対象が自分ごととして前のめりに関わる流れにもっていく関係性づくりが急務。</p>	<p>◆今の課題が明確化できたので、引き続き行政と普及の両面から取り組んでほしい。</p>	<p>○次年度は、生産者の意見聴取をもとに産地ビジョンの素案を作成し、部会員（役員・支部長等）と検討を行い、ビジョン策定をめざす。</p> <p>○主要園芸産地の維持発展プロジェクトにおいて、JAや市との意識統一（情報共有）を図り、ビジョン策定に向けて支援を行う。</p>

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
隠岐島前モデル「半牧半X」による新規就農者確保の取り組み (隠岐支庁農林局農政・普及部)	<ul style="list-style-type: none"> ◆70歳以上の生産者が三分の一以上を占める現状では、新たな担い手の確保が急務というのは切実。 ◆U I ターン新規就農者確保に向けた取り組みを「半牧半X」と名付けたのは記憶に残りやすく、少子高齢化における担い手不足という難題を少し違った角度から考えられるような期待感が持てる。 ◆地域特有の取り組みで成功事例の出現を期待する。 ◆繁殖経営と定住のセット対応が必要で連携の良さは感じられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆隠岐島前での経営モデルの自己資金300万円というのがネックのようなので、資金面での支援方法を知りたい。 ◆J A、町村、隠岐支庁等を構成員とする「隠岐牛産地強化プロジェクト」を立ち上げ、受け入れ態勢の整備や、繁殖基盤の強化、生産管理の効率化といった課題解決に向けて連携して取り組まれていることがわかった。 ◆就農マニュアルや経営モデルも整理されており、一体的な動きになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆過去3年間に7名の新規就農者のうち、3名が半牧半Xモデルで就農中、さらに今後も各地域に適したモデルを検討されおり期待が持てる。 ◆入会権等公共牧野利用に係る障壁や農村社会における信用基盤の形成など、個人では対応しきれない課題の打破に期待。 ◆X部分の幅が広く、目標達成の判断が難しいように思える。 ◆対象者を個々でなく、組織化することは考えられないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆若いU I ターンの新規就農者が隠岐に溶け込めるような多様な「半X」の部分を出してほしい。 ◆功事例が出れば広く情報発信をしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○今年度、関係機関によるプロジェクトチームにより、就農プログラム・就農モデル「半牧半漁」、「半牧半X」を作成。 ○次年度は、プロジェクトチームでさらに事例を分析するほか、就農モデルを活用した、新規就農者確保の取り組みを開始。 ○また、本取り組みの地域への普及・拡大についても検討する。

課題名	評価項目				次年度の普及活動の改善について
	課題設定と活動計画	普及指導活動の体制・方法	普及指導活動の成果	その他	
中山間地域等におけるミニトマト増収技術の確立（技術普及部）	<ul style="list-style-type: none"> ◆中山間地域の問題である人口減少、農業従事者の高齢化に適した課題設定。 ◆中山間地域での施設野菜（ミニトマト）の取組は波及効果が高い。 ◆収量の成果目標は細かく設定されている。 ◆ミニトマトの単収をいかに上げるかは、経営に直ぐに反映して、一番大切な項目。 ◆中山間地域のおかれた状況をふまえた上で技術確立が展開されている。 ◆新規就農者が多く取り組むミニトマトが対象であり、新規就農者の経営発展のみならず地域振興においても波及効果が高い。 ◆現場の生産者や試験研究機関との緊密な連携がとれている。 ◆ミニトマトの増収は、中山間地域において必須の取り組みであり、喫緊かつ適切な目標。 ◆中山間地域農業の維持発展につながるというのも、理にかなった作物選定。 ◆中山間地の収益性のある複合経営の課題解決として有効。ただし、中山間地に求められている夏 	<ul style="list-style-type: none"> ◆中山間地域で全国的に需要が多い「ミニトマト」の収量増加に対する内容は効果的。 ◆収量増加によって品質はどうなったのか？分析できているのか分からなかった。並行して品質向上の分析も必要。 ◆中山間地域での冬期対策がなかったが、燃料費、コスト的には安定経営ができるのか？ ◆株間を狭めることは、密植で病気の発生を懸念したが、全体的な収量で目標達成できたことは成果が数字として出ていると思うが、裂果したものでも加工することによって付加価値が付き、それも増収に繋がるのでは・・・。 ◆現状分析をして適切な対応策（栽植本数の変更、二期作の導入、灌水プログラムの一部改定など）を講じ、目標収量を達成しているので、堅実に効果的な活動が実施できている。 ◆今回の結果を農業技術センター、中山間地域研究センターに提供し、研究課題につなげることができたことも、今後の増収技術開発への期待が持てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆収量増加に対して栽植本数の変更、二期作、防除暦の全面改訂など分析できており、収量減少要因なども細かく分析されている。 ◆地域への波及には今後、安定、継続して収量の増加が見込めることが重要。 ◆リースハウス等の支援により新しい人が取り組みやすく、栽培方法で単収が増えればやりがいがあり、農業技術センターや中山間地域研究センターの後押しは心強い。 ◆研究機関との連携による環境制御等の新技術導入で、収量増加の期待が持てること、施設の充実も必要条件を提示することで生産者にわかりやすく意義が伝わる。 ◆今後の普及対象も、自立経営を志向する新規就農者、経営多角化を目指す集落営農等と具体的であり、期待が持てる。 ◆活動の成果と今後の重点目標が詳細に分析されている。 ◆目標販売額を実現できた点から、意識の変化が大いに期待できる。 ◆経営改善のみならず、リースハウス事業への展開など、地域への高 	<ul style="list-style-type: none"> ◆今後、中山間地域で収量増加が継続できるか問題はあるが、中山間地域農業に対してこのような活動は必要。 ◆単収増は収穫時の労力も増え、大変な面もあると思いますが、それにあわせて雇用も発生すれば地域活性化にも繋がり、新規就農者や集落営農等の経営が安定すれば後に続く人も増え、普及の意義がある。 ◆減収要因に関する対策の検討を重ねながら成果が出ており、地道な活動が実を結んでいる。 ◆現場の緻密なデータをもとにした技術開発など、対象 	<ul style="list-style-type: none"> ○品質の低下はなく、むしろ夏期の生産がないため、秀品率は向上している。 ○10 アール当たり燃料費は10万円、種苗費は20万円増加するが、一方で売上げは200万円増加している。 ○植付本数の変更は、標準の本数に適正化したもの。また、産地化が進めば格外品の加工も必要と思われる。 ○今後、技術の確立のため導入農家のフォローアップを行う予定。 ○産地全体を二期作に移行させるものではなく、一般的に夏期はミニトマトの出荷がだぶつき単価が低迷するため、出荷量の是正効果も期待できる。 ○今回は生産面のみ発表したけど、経済性の向上が最終目標。大まかな経済性調査は行って

	<p>秋作の出荷産地としては、県内供給体制等での課題は残る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆増収技術の実証試験のようで目標も収量のみで特異的な活動。 ◆経済性の指標も必要か。 ◆課題に対する支援がとてもシンプルで成果も分かりやすい。今後、波及させやすい案件。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ミニトマトの低収量が問題となる中での展開で、適切な時期に活動を始めている。新規就農者を中心とした若手生産者の経営改善であり、高い効果が期待できる。 ◆現場の生産者、試験研究機関との組織的な連携、関係機関との連携、役割分担が明確。 ◆今後の普及計画の中で、課題となる産地化、施設投資の点での提案が期待される。 ◆今後、関係機関が状況を共有し支援体制が生まれ、より多くの人を巻き込む大きなうねりになってほしい。若手普及員とペアで支援するなど、ノウハウとこれまでの経緯の引き継ぎがなされていくと次につながり、より波及効果が高まる。 	<p>い波及効果が期待できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆植栽本数と未誘引栽培の導入での課題解決は、栽培現場での普及が進む可能性を秘めており、今後の活動に期待。 ◆対象の立地条件が異なる中で目標はクリアしたが、作型として確立したかは不明。 ◆この実績を情報発信し、市町、JA等によるリースハウスの事業化に結び付けられないか。 ◆結果が収穫数、販売額で分かりやすく見えるため対象もモチベーションが維持しやすい。 	<p>への積極的な関与により、普及員の資質が向上している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆県域でのプロジェクト等を設置し、重点的取組としてほしい。 ◆すばらしい成果は、長期にわたる根気強い伴走支援の賜物。 	<p>るが、今後詳しい調査を行い、普及活動に役立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○現在、県で推進しているリースハウス整備と今回の成果を活用した産地化推進を計画している。 ○今回の活動では、若手普及員とセット活動を行い、普及員の資質向上を期待している。
--	---	--	---	---	--